インターネット版

白夜

第１号

（旧・白夜から通算して第 41 号）

2021 年１月

北海道スウェーデン協会

当協会の機関紙「白夜」は、協会創立の時期より、毎年度一号ずつ発刊を重ね、2019 年４月には、第 40 号（2018 年に行われた一連の当協会創立 40 周年記念行事を特集）を数えました。

しかしながら、この 40 年の間には時代も変化しました。文字中心の白黒印刷である「白夜」を、いつまでも多額の印刷費用がかかる紙媒体で発行し続けることは、必ずしも効果的とは言えないと判断するに至ったところです。このため、今後、「白夜」は、インターネットで提供することにしました。

インターネット版では、自由なテーマの下で執筆いただいた会員各位の投稿をまとめて、読者の皆様にお読みいただきたいと考えています。たとえば、現在は難しい状況ですが、コロナ禍が収束したあとには、スウェーデンへの旅行記などもいいと思います。

会員各位におかれては、何時でも結構ですので、事務局まで原稿をお寄せいただければ幸いです。word 文書（40 字×40 行）などで、1600～3200 字程度を目安に（それより長くなっても構いません）、必要に応じて、写真も添付ください。

ある程度の原稿が集まりましたら、すぐに発行できますので、以前は年一回だった発行回数が増えるかもしれません。

今回は、実例をお示しする意図から、事務局の目黒が二編の原稿を執筆しました。

現在、世界はコロナ禍一色に染まっています。このため、当協会としても、実体的な活動が殆ど全くできていません。活動が再開すれば、紙媒体の「白夜」に掲載されていた当協会の主要行事年間報告などの掲載も考えていきたいと思っていますが、今回は、寄稿文だけの体裁になっています。

それでは、皆様の原稿をお待ちしております。

在スウェーデン大使館の記憶

常任理事　目黒聖直

私が３年３か月の大使館勤務を終えてストックホルムから帰国したのは、2000 年６月末のことだった。それから既に 20 年以上の月日が経ってしまい、当時のことを多少詳しく記したところで、ももう時効ということで許してもらえるだろうと思い、大使館時代のことを少しく書いてみたいと思う。

1997 年４月、私は、北海道開発庁（現・国土交通省北海道局）からの出向として、在スウェーデン日本国大使館に勤務することになった。

この大使館には、私のような出向組の館員が多く、加えて、大使も財務省出身の方だった。出向組が多いのは、それだけ各省庁にとって、スウェーデンという国への関心が高いということを意味する。厚生省（現・厚生労働省）は福祉国家としてのあり方、法務省は男女平等などの分野で世界最先進である人権問題への取組状況等、科学技術庁（現・文部科学省）はノーベル賞、防衛庁（現・防衛省）は非同盟中立政策、といった他の国にはないものをこの国で調べて派遣元の省庁にとっての有益な情報にしようとしていたのである。

私は、大使館では、主に内政と途上国援助政策を担当した。

前者は、スウェーデン国内の政治・行政の情報を東京の外務省本省に伝達する仕事である。

たとえば、総選挙があると、事前の当地での結果予想の状況、そして、もちろん、当日の結果を詳しく報告することになる。そのほか、北海道開発庁の人間であるから、地域開発や地方行政に関することも担当した。その調査を重ねていってわかったことは、スウェーデンでは、地方自治が大変に発達している一方で、地方行政庁という国の行政を総合的に行う役所が各県ごとに置かれているということ。誤解を恐れずに、もの凄く極端に喩えれば、北海道開発庁が全国の全地方にあるというイメージである。

もっとも、北海道開発庁の方は、その後、我が国の行政改革で統合されて、その名称は消滅してしまった（同庁の出先機関だった北海道開発局は従来どおり存続している）。

途上国援助に関しては、外務省本省が主要国の政策の動向を知りたいというときに、こういうことを調べてくれという文書を送ってくる。その調査内容に関して、スウェーデン外務省なりSida（国際開発協力庁）なりの担当者から回答を得るのが仕事である。

こういった調査は、内容によって、全先進諸国に対して行われることもあれば、いくつかの国だけに行っておおよその状況を掴む、ということもある。後者の場合、文書は、アメリカ（超大国）、英仏（かつては途上国の多くはどちらかの植民地だった）、そして、スウェーデンに対してのみ行われるという場合が多くあった。なぜ、米英仏と並んでスウェーデンなのかというと、大国の意向だけでなくそれ以外の国の動向を知ることも重要であり、そのときにはスウェーデンがその代表に選ばれるということだろう。そして、それはなぜかというと、植民地を経営したことが殆ど全くなく、クリーンなイメージゆえ途上国からの信頼がある、という事実に基づいているのだろうと思料される。かつて現役の首相がベトナム戦争反対のデモに参加したこともあり、また、コンゴ動乱で殉職したハマーショルド事務総長の出身国でもあって、そういったことが、途上国からの信頼が厚い理由になっているのだろうと思う（外務省本省からそういう説明を聞いたことはない。あくまでも私の推測であるが、出向組の同僚館員も同様の意見を持っていた）。また、世界的に見て国民一人当たりの政府海外援助額が高いのは、当時も今も、スウェーデン、ノルウェー、ルクセンブルグといった国々であり、そういったことも我が国の外務省がスウェーデンの動向を気にかけていた理由であったに違いない。

こうした行政事務のほかに、特に夏場にはもう一つの館員にとって大切な任務がある。

それは、我が国の国会議員の方々の出張旅行への対応である。

夏の訪問が多くなるのは、国会が夏休みで議員の皆さんのスケジュールが空いているのと、スウェーデンが爽やかで過ごしやすい時期であるために訪問したくなるからだ。

議員団訪問予定の連絡があると、訪問先の役所や施設にアポを取る。だが、スウェーデン側も夏休みだから、担当者が数週間の休暇で不在のため、アポ取りが難航することもある。苦慮しながら数件のアポを組み合わせてスケジュールを組んで、空いた時間には、市内視察を入れて、現地を知っていただく。

その際に議員の方たちと一緒の時間を過ごし、時には話もさせてもらったのは得難い経験であった。そういう方たちが後に大臣になり、あるいは、今でも国会で鋭い質問をして大いに活躍されているのをテレビで見たりすると懐かしく思う。ただ、以上に書いたことは、あくまでも２０年以上前のことなので、今は状況も大きく変わっているかもしれない。

イベント的なものでは、天皇皇后両陛下（現上皇御夫妻）のスウェーデン御訪問に対応したのも大切な思い出だ。私の時代は日本人ノーベル賞受賞者が一人もなく、もし受賞者が出ると大使館も総出で対応に当たると聞いているが、それすらも比ではないほどの大イベントである。御訪問は 2000 年の６月。本来その年の４月に帰国することになっていた私も、そのために６月まで任期が延伸したのだ。

百人単位の随員・随行員のケアもあるため、十数名のスウェーデンの大使館だけでは対応できず、欧州各国の大使館から応援者の派遣があり、また、ストックホルム在住の日本人を臨時で雇用したりして、数名ずつの班をつくった。私は、宿舎班の班長であった。

元総理大臣の橋本龍太郎氏が随員たちのトップであったが、同氏らが宿泊するグランドホテル（ノーベル賞受賞者の宿舎としても有名）

に籠って、随員たちに伝達事項があれば伝え、随員たちからリクエストがあれば応えるのである。橋本氏が出入りするときは、予めエレベーターを止めておいて御本人を待たせないようにしたりもした。ちなみに、天皇皇后両陛下やそのお付きの方々は、スウェーデン王室の王宮に宿泊されていて、グランドホテルにはお立ち寄りになっていない。

そういうわけで、私は、ホテルから殆ど出ない状態を余儀なくされたのだが、一度だけ、大使の公邸に赴いた。大使が、館員たちを両陛下に紹介する時間があったのである。

館員が夫婦で一緒に一列に並び、大使が両陛下に一人ずつ紹介していく。

私の番になると、大使は「目黒書記官です。北海道開発庁から出向しています。」と説明してくださった。両陛下に北海道開発庁の名が告げられることはそうはないはずであり、私の名前だけでなくわざわざ出向元の省庁名を告げてくれたこのときの大使にはただ感謝しかない。この大使は、藤井威氏と言い、素晴らしく能力が高いのは当然として、大変に人柄のいい方であった。帰国後にはスウェーデンに関するたくさんの著書を出されたが、それらは、研究者の著書の中でも度々引用されるほど、優れた内容のものである。

それにしても、目の前に立っておられる両陛下のオーラというか相手を圧倒する感じは強烈だった。穏やかな表情でのゆったりした振る舞いなのに、とにかく圧倒される。理屈では説明できない何かが全身から照射されている。そんな印象だった。とにかく両陛下の御立派さに感銘を受けた。その後も御退位まで常に世界の平和を念じておられた両陛下には、国民の一人として敬愛と深い感謝の気持ちを捧げたい。

ともあれ、一連の公式行事を終えて、両陛下が無事帰国されたのち、妻と私は、慌しく帰国の途に就いたのであった。

それ以来、私は、一度もスウェーデンの土を踏んでいない。再び訪れるのは、いつのことか。

冬のウプサラ（提供：高松要氏）
（本文と直接の関係はありません）

スウェディッシュメタルお勧めの曲

常任理事　目黒聖直

筆者は、全く楽器を演奏できないし、音楽理論も全然わからない。だが、スウェーデンが世界トップの水準である分野の一つであるヘヴィメタル・ロック（以下「メタル」）に、どんな曲があるかということは、是非とも多くの皆さんに知って欲しいところだ。その強い思いに促されて、ここでは、10 曲を御紹介する。

各曲とも、数字に続いて、国内盤が発売されている場合の日本語タイトル、原タイトル、バンド名、演奏時間、【】内にメタルのサブカテゴリ―、発表年の順に表記している。原タイトルを入れたのは、you tube などで検索しやすいように、という趣旨である。ここに挙げた曲は本文中に出てくるものも含めて、すべて you tube で聴ける（2020 年 10 月現在）。

興味のある曲があれば、是非お試しあれ。既に解散・活動停止したバンドも現役のも混在しているが、そのへんの説明は割愛している。

① Till Dagmar/Evergray 1'39 【プログレッシブメタル？】 2006

アルバム中の二曲のボーカル曲に挟まれたエレキ or 生ピアノによる小休止みたいな曲は、メタルでなくても、筆者ですらカーペンターズや、日本では平原綾香や柴田淳のアルバムで聴

いたことがあり、よくあるアイディアではある。でも、いい曲だ。タイトルの till（スウェーデン語）は英語の to に当たり、亡くなった Dagmar という人（作曲したキーボーディストの祖母らしい）に捧げるとのクレジットがある。

いつもダークでメランコリックな曲を演奏するエバーグレイは、キーボードを非常に効果的に使い、時にはゲストの女性ボーカリストによるコーラスで盛り上げるなどして、実にドラマティックな音世界を構築しており、筆者が一番好きなバンド（次にヴァンデン・プラス（独）とサーカス・マキシマス（ノルウェー））だ。ところがなんと、何故か我が国では一枚を除いて、彼らの国内盤は全く発売されていない。CD 会社の連中は一体何を考えているのか。

彼ら本来の曲を聴くのなら歌の代わりに延々と嘆くようなナレーションが入っていて、ヨーテボリ交響楽団も参加している When the Walls Go Down はどうか。ボーカル曲なら、A Touch of Blessing や Departure など。

② エンジェルズ・イン・ザ・スカイ Angels in the Sky/Insania 8'17【パワーメタル】2001

パワーメタルというのは、スピードのある伴奏に乗ってボーカリストがハイトーンで歌う形態のメタル。このインサニアは、はっきり言ってあまりいいバンドとは思えなかったのだが、この曲だけは突然変異ではないかと感じるほどの感動的なバラードタイプの曲。

彼らの共通の知人であったらしい Johanna Carlsson という亡くなった女性に捧げられており、詞（是非、対訳を読んで欲しいところ）も、彼女を失った悲しさが綴られているのだが、最後に、「それでも僕たちは前を向いて行かなくてはならない、そして、いつか君にもまた会えるだろう」とポジィティブになっているところがとても共感できる。泣ける。

③ ザ・ファイナルカウントダウン The Final Countdown/Europe 5'10【北欧メタル】 1986

スウェーデンのメタルと言えば、このバンド、この曲を抜きにしては語れない。彼らヨーロッパのブレイクにより、スウェーデンのメタルバンドが一気に世界に進出する。この曲は、彼ら最大のヒット曲であるのみならず、アバのダンシングクイーン、カーディガンズのカーニバルとともに、最もよく知られたスウェーデンソングと言えるのではないか。曲名を知らなくても聴けば「この曲か！」という人は多いはず。

北欧メタルというのは、北欧のバンドによる透明感のある美しいメロディーの歌を中心としたメタルのこと。歌中心なので延々と続くギターソロやキーボードソロは少なく、結果的に一曲の演奏時間もあまり長くない。その意味では、後述のキャンドルマスなどは、北欧出身ながら間違っても北欧メタルとは呼ばない。

④ イカルスの夢 組曲作品 4 Icarus' Dream Suite Opus 4/Yngwie Malmsteen's Rising Force 8'30【ネオクラシカルメタル】 1984

スウェーデンのメタルを語るときには、このイングヴェイ・マルムスティーンも外せない。若い頃には同じストックホルム出身のヨーロッパのメンバーと組んだこともあったらしいが、その後、成功を求めてアメリカに渡った。

ネオクラシカルメタルの創始者である彼は、50 年を超えるメタルの歴史において、リッチー・ブラックモア（英、元ディープパープル、レインボー等）と並んで最も重要なギタリストと（少なくとも我が国においては）認識されている。ただ、心に残るボーカル曲が殆どないので筆者は全く愛聴していないし、なによりも、彼が師と仰ぐブラックモア同様、性格が最悪だと言われているので、ファンになる気もしない。

この曲は、彼（の率いるバンド）のファーストアルバムに入っているインストゥルメンタル曲で、クラシックの「アルビノーニのアダージョ」をギターで演奏した後、オリジナルのメロディーに移行する。生ギターでクラシック音楽の雰囲気も醸し出しながら、エレキギターが

メロディーを紡いでいく。人によっては退屈と感じるかもしれないが、7分 15 秒当たりから最後までのホラー映画（それも、スプラッターではなく心理的な怖さで迫るようなやつ）のエンディングに使いたいようなパートは秀逸。

バンドには、スウェーデンが世界に誇る天才キーボード奏者イェンス・ヨハンソン（現在はフィンランドのストラトヴァリウスのメンバーで、レインボーでも活動）が参加している。

⑤　スピリット・オブ・ザ・ウィンド Sprit of the Wind/Spiritual Beggers【ストーナーメタル】　5'51　2010

このバンドのリーダーであるマイケル・アモットも重要なギタリストである。我が国のメタル専門誌で何度も読者人気投票第一位になっているアーチ・エネミーを率いている彼が、並行して活動しているのが、このスピリチュアル・ベガーズだ。この曲は、寂寥感に溢れた曲。歌詞にも救いがない。諸行無常の響きがある。タイトルは、「風の精霊」という意味だそうだ。

ストーナーメタルとは、伝統的なメタルや 70 年代のサイケデリック・ロック、ガレージ・ロックに影響された、ブルース色の強いメタル、と言っても、わかりにくいのだが、まあそういうことだ。ただ、この曲は、それっぽくなく、ブルージーな感覚もゼロだ。

⑥　ジ・アフォリズム The Aphorism/Time Requiem　6'30【ネオクラシカルメタル】　2002

速弾きで聴く者を圧倒し、鍵盤の魔術師と呼ばれたリチャード・アンダーソン率いる五人組、タイム・レクィエム。彼のワンマンバンドとも言われたが、ベーシストとドラマーも抜群にうまく、メタル評論家が、バンドとして「なによりもアンサンブルが素晴らしい」と絶賛した。ボーカリストは、のちに⑤に加入する。

この曲は、最初の２分くらいのイントロが聴きもの。ロックの楽器でクラシックをやるとこうなります、というところがよくわかる。歌メロの部分は案外普通で、歌だけ聴きたいなら、むしろ Hidden Memories とか Dreams of Tomorrow の方がいいと思うが。

⑦ グッドナイト Goodnight(Farewell Pt.2)/Seventh Wonder　7'10【プログレッシブメタル】　2018

プログレッシブメタルというのは、プログレッシブ・ロック（プログレ。クラシック、ジャズ、民俗音楽の要素を取り入れ、演奏技術の高さと曲構成の複雑さを特徴とする）の影響を受けたメタルのこと。プログレッシブメタルでは、プログレの定番であるコンセプトアルバム（アルバムの全曲で一つの物語になっている）の手法を取り入れることがよくあり、この曲も、コンセプトアルバムの中の一曲なので、こういう冴えないタイトルになっている。哀愁を帯びつつも躍動感あふれる歌メロが素晴らしい。ただし、最後の一分間は多少だれる。

⑧　The Well of Souls/Candlemass　7'25【ドゥームメタル】　1987

ストックホルム出身のキャンドルマスもスウェディッシュメタルの最重要バンド。ヘヴィメタルの帝王ブラックサバス（英）に影響を受けながら、ゆっくりとして重くのたうち回るようなギターのリフがおどろおどろしい雰囲気を醸し出すドゥームメタルを創始、世界中のメタルバンドに影響を与えた。

この曲は、圧倒的歌唱力を誇るボーカリスト（現在は脱退している）の歌声が呪文のように響き渡り、荘厳で宗教的な雰囲気さえ漂う。

ほかに、今わの際にある主人公の前に、彼が若いころに困窮した男に施しをしたことを称える三人の天使が現れるという内容の詞の Samarithan という曲にも、このボーカリストの豊かな表現力を感じさせられる。

⑨　フェイス・イン・アザーズ Faith in Others/Opeth　7'41　【一応、プログレッシブ

メタル？】　2014

もともとはデスメタルバンドだったオーペスだが、現在ではデス声（後述）もやめて、なんとも分類しようのない独自の音世界をつくりあげている。個人的には、メタルというよりプログレではないかとも思うくらいだ。

この曲は、そのプログレの名曲であるキングクリムゾン（英）の「ポセイドンのめざめ」にも似たひたすらに悲しいメロディーが心に染み渡る。

⑩　インターメッツォ・リベラルテ Intermezzo Liberte/Arch Enemy　2'50【デスメタル】2007

デスメタルというのは、デス声という人間のものとは思えない声（推理ドラマの誘拐犯による脅迫電話の声にさらにドスを利かせたような感じ）で歌うメタルのことで、筆者も拒絶反応を示すくらいだから、まともな神経の人が喜んで聴ける音楽ではない。でも、このアーチ・エネミーは例外だ。そのカギは、英国人とのハーフでヨーテボリ近郊ハルムスタッド出身のマイケル・アモットが弾くマイルドでメロウなギター。ランディー・ローズ（米、故人）を除けば、彼ほど美しいメロディーを紡ぎ出せる者はいない。ちなみに、このバンドはツインリード（ギタリストが二人）だが、メインは彼だ。

アーチ・エネミーの存在もあって、ヨーテボリはデスメタルの聖地と呼ばれ、わざわざ CD の録音に来る外国のバンドもある。

この曲は、インストゥルメンタルなので、デス声を聴かなくて済む。もしも試しに歌入りを聴く勇気があれば、二本のギターのハーモニーにベースの太い音が絡んでくるパートが滅茶苦茶格好いい Under Black Flags We March やイントロの悲しげなメロディーと力強いサビの部分の対照が印象的な The Eagle Flies Alone などはどうだろうか。ちなみに、このデス声、なんと女性が出している（初代は男性だったが、二代と三代（現）ボーカリストは女性。）。

【３曲だけ載せてみました】

https://www.youtube.com/watch?v=bTg2bPUk-Hk（Till Dagmar）

https://www.youtube.com/watch?v=T1Va1F1dQWo（イカルスの夢　組曲作品 4）

https://www.youtube.com/watch?v=gzHEb0ZOOAM（ジ・アフォリズム）

ベクショーの街並み

（本文と直接の関係はありません）

インターネット版 白夜 第１号終わり